

三、年齢階梯型（ひと結合型）

村落と家連合型村落

東京大学 佐 渡 和 子

1、はじめに

日本村落の社会形態は、幾つかの異なる型に分類される。従来の代表的村落社会の類型としては、農村社会学では有賀喜左衛門・福武直の「同族型」村落・「講組型」村落の二類型理論がある。法社会学では、磯田進・川島武宜・江守五夫らは、社会の構成単位が家ではなくて人である年齢的秩序に沿った社会構造をもつ村落を別の類型として設定している。

本報告では、人が社会の構成単位をなす社会を、「同族型」村落・「講組型」村落という二つの家型村落と比較しながら、その構成原理を明らかにすることを主要目的とするが、同時に、第三の類型である人型村落と比較することによって、実証を通して、伝統的家型村落の特徴を浮かび上げたい。三類型の実例と考えられる調査三村落は、「同族型」村落は秋田県大曲市中沢、「講組型」村落は（水平的な結合が強いという意味では「講組型」に近いと思われるが、なお「同族型」村落の特質も部分的にみられる村落を「亜講組型」と規定して）、茨城県新治郡新治村上坂田、「年齢型」村落は沖縄県國頭郡國頭村奥である。

2、村落社会の構造

ある社会を構造として捉えようという場合、第一に社会集団の構

成単位が問題になる。これまでの社会学の定説では、村落社会の単位は家といわれてきたが、むしろ個々人と考えた方がよいムラも存在していると考えられる。以下では、「奥」を事例として、発生的議論をふまえ、現代の構造の聴取や記憶から過去を復元する方法で、年齢階梯型村落の近代農民家族とムラの原型を確認し、家型村落の家やムラとの違いを明らかにする。

三調査村落はすべてムラに血縁的集団・地縁的集団・年齢的集団をもっている。以下、これらの比較を試みる。

「中沢」は、開拓家の土地占領の経済的基盤の上に形成した本家地主・分家小作人の上下的身分関係をもフマキとよばれる親族集団の同族をもつ、血縁的家連合体と捉えられる同族が発展している結果、有力同族本家地主の家長が世襲的にムラの最高の役職を独占してきた例から知られるように、同族秩序に沿った社会秩序が親類関係・地縁的集団・年齢的集団などを含めて社会全般を規制してきた特性が認められた。しかし、「上坂田」は古代開墾村であって、土地所有は細分化されており、「同族型」村落よりマケとよばれている親族集団の同族組織は小規模であって機能も弱体化しており、対等的関係がより強化されていた。その結果、同族と同質の性格をもつ地縁的家連合体すなわち組的結合が社会秩序の中軸を担ってきた。両型村落の主要集団の構成単位は家であり、聚落的家連合体ともいわれてきたように、村落社会の構成単位は家と捉えられる。

他方、「奥」の親族集団である「門中」は、明治32年まで存続した地割制度などと関連して経済的機能はもたず、その結果政治的機能ももたず、宗教的機能のみをもってきた。したがって、親族においては日常生活の互助は個人中心の親類関係が中心的役割を担ってき

た。隠居制はないが寝宿慣行をもつ内婚率の高い村落であり、若者組を中心として年齢的集団が発展して社会構造の基本秩序の主軸をなしてきた。神役の選出法、ムラ仕事・葬式などの組の出役法、婚姻配偶者の選択法、ムラ墓などから、血縁関係や家族のエゴよりムラとしてのまとまりの優越が知られる。「家産」を欠いて「家長」の權威も特定された「家柄」もなく、制度的家は存在せず、社会構成の単位は年齢に基づいた人、と判断がなされる。

3、二類型の社会構造的特色——とくに「年齢型」村落について——
「同族型」村落も「講組型」村落も家を単位とした同一類型としてみるができる。その特色がより明確な「同族型」村落をとり上げて、村落社会構造を規制する生業形態との関わりをふまえながら、社会構造の特色が端的に捉えられる①家族形態 ②階層制 ③社会的相互作用を指標にして、以下では二類型として「年齢型」村落との比較を試みる。

「同族型」村落 ①労働集約度の高い稲作農耕をなす「中沢」では、分家群の家族労働力に依存する本家経営という家経営体が多いため、同族集団は適合的労働組織形態であった。傍系親族や奉公人などの家成員を多く含んで、原型的には直系家族を中軸とした大家族形態が多い。②同族結合が村落構造の基軸をなしているため、ムラの支配構造も社会構造も同族秩序に沿った階層制を形成してきた。③ムラが家を通して、あるいは家が人を規制する。

【奥】 ①漁業・林業・伝統的焼畑耕作などの生業の主な労働様式は、ムラ共有を基礎にした生産手段を利用する基本的作業様式と青年層中心の労働力単位による労働組織で行われてきたのであり、家

族の独立性は弱い。長男は親と同居し、次・三男は屋立する形態が一般的であったといわれている。②個別の家族が自立できない低生産の故に、ムラが家族のエゴを抑制して、性的年齢的分業に基づいて共同生活を保持してきた結果、階層分化は未成熟であった。③ムラが直接にムラ人達の相互作用を規制してきた。

以上、村落社会構造の差異は、異なった地理的・政治的・経済的条件の歴史的過程における相互作用の結果として形成展開してきたと考える。日本では、近世中期位までに人型村落から家型社会への移行が多くみられた。本報告で例とした沖繩以外にも「年齢型」村落は奄美などに連なって本土に広範に広がっている類型であり、発展類型ではなく、同時依存類型として捉えることができたと考える。

4 むすび

日本の家は、これまで農村の生活と生産のための重要な役割を果たしてきた。しかし、世界的にみると、家を単位としている社会は特異形態といえる。沖繩における社会の単位をなす人はいわゆる「個人」ではなく、ムラの規制を強くうけた人である。換言すれば、家族の自立性の保証もしえないような限界をもってきた。今日は、両型村落はともに、生活保障機能の弱化などの矛盾や困難に直面している。今後は、日本におけるこの二つの村落形態の伝統を反省し、両者を越えて人間を主体とする新しい農村と農業を形成しようような自立した「個人」あるいは近代的「個人」の形成が望まれる。なお、東南アジアの村落は沖繩と同様に人型村落と捉えられるが、ムラの結束力は弱い。ムラの結束力の強さは、日本の民族的共通性と考え、両者の差異の解明は今後の課題である。